

原作・北原樹恒きたはらきつね

作・やまねたかゆき

1

さて、この状況はいつたいたいどうしたことだろう？

八月のある朝。私、進藤沙紀さきは頭を抱えていた。頭がズキズキと痛む。考えがまとまらない。

ふつか酔いだ。

昨日の夜は、大学の友達に誘われて飲みに行った。一応、合コンということだったらしい。最近彼氏と別れたばかりの私のために企画したとか何とか、そんなことを言っていたような気がする。ただ私は男なんかそつちのけでヤケ酒のように飲みまくって……。

途中から、記憶がない。で、問題はこの状況だ。

例えば「昨日知り合ったばかりの男とホテルのベッドの中」とかいうのであれば、それはそれで

問題であるが納得はできる。

しかしこれは……。

今いるのは、自分の部屋だ。大学に近い、アパートの一室。

そして、自分のベッドで寝ている。

そこまではいい。

問題は、私が一人きりではないということと、二人とも服を着ていないということだ。

昨日初めて会った男と、ホテルじゃなくて自分の部屋へ来てやつちやった？ それならこんなに悩みはしない。というか、悩みのベクトルはまったく違ったものになる。

私の隣で、全裸のまま静かな寝息を立てているのは……女の子なのだ。

それも、高校生になるかならないかくらいの。

どちらかといえば小柄で、華奢な身体つきだろうか。

今どき珍しい、腰まで届きそうな長いストレートの黒髪が綺麗だ。

『烏の濡れ羽色』といった古くさい表現が似合いそうな黒髪と、白い肌のコントラストが印象的

だった。

伏せられた睫毛は羨ましくらい長い。

あと何年かしたら、すれ違う男たちがことごとく振り返るような美女になるだろう。今だって、すれ違う男たちがことごとく振り返るような美女なのは間違いない。

しかし、いったいこの子は誰だろう。

私の知り合いではない。

少なくとも、昨夜より前に会ったことはないはずだ。これほどの美少女、一度会ったら忘れるはずがない。

ベッドの脇に、この子のものと思しきセーラー服が落ちていた。

見覚えのないデザインだ。

レトロな雰囲気で、それでいて品がある。まるで、コバルト文庫の『マリア様がみてる』を彷彿とさせるようなセーラー服は、この少女の雰囲気にはぴったりだった。

私を知る限り、札幌市内にこんな制服の学校はない。

それにしても、この子とはどこで知り合ったの

だろう。

セーラー服の美少女と、居酒屋でお近づきになれるとは思えないから、帰り道のどこかだろうか。何かのきっかけで知り合って、意気投合して部屋へ連れてきた……。オーケイ、そこまではいい。一つのベッドで二人が寝ていることも良しとしよう。私の部屋には他に予備の布団なんてないから、友達が泊まっていくときも同じベッドで寝るか、三人以上なら床に雑魚寝するしかない。

それにしても、二人して裸というのはどうということだろう。下着すら着けていないのだ。

そして何より、シーツについた、この、小さな赤い染みは何だろう。私の指にも、赤褐色の汚れが残っている。……まるで、乾いた血の痕のような。

思いつく可能性は、二つ。

仮説一。昨夜は暑かったので二人とも裸で寝た。たまたまこの子が生理だった。

仮説二。私はこの子とエッチした。この子はバージンだった。

……どちらが説得力あるか、考えるまでもない。

(うつ……)

頭が痛いのは、ふつか酔いのためだけではない気がする。

念のため言っておくけれど、私はレスビアンではない。そういう趣味の知り合いがないわけではないが、私は違う。

ついこの間までちゃんと彼氏もいた。……先刻も言ったとおり、別れたばかりだけど。

(……まさか)

たらりと冷や汗が落ちる。

彼氏と別れた原因は、向こうが二股をかけていたからだ。それで男というものに幻滅して、酔った勢いで同性に走ったなんてことは……いやいや、まさか。

だけど、他にどう説明のしようがあるだろう。

「う……ん……」

女の子の睫毛が震える。ゆっくりと目が開かれる。

まだ、ぼんやりとした様子だ。

薄く開いた目で私を見る。

「……おはようございます」

ちょっとはにかんだ表情が可愛い。

「あ、えっと……おはよう」

私もとりあえず、朝の挨拶を返す。他に対応のしようもない。

女の子は一度起き上がるようにしたが、自分が裸でいることに気がついて、恥ずかしそうにまたタオルケットにくるまった。

「……ところで、あなた誰？」

とりあえずそう訊ねる。すると、女の子の表情が一変した。

傷ついたような、悲しそうな、そして少しだけ怒ったような。

「まさか、覚えていないんですか？ あんなことしておいて……」

っ！

あんなことって、やつぱり、アレ？

したの？ やつぱり？

「ひどい！ わたしのバーズン奪ったくせに」

「え、ちょ……ちょっと……」

「親切なふりして、行きずりの女の子を弄ぶのが目的だったんですね。沙紀さんってひどい！」

「ちょ、ちょっと待って！ いま思い出すから……。二日酔いで頭が痛くて、考えがまとまらないんだ」

なんだか、ただならぬ雰囲気だ。

もう一度、最初から思い出してみよう。

夕方、友達と待ち合わせして、居酒屋へ行って……。

友達とどこで別れたのか、帰りは一人だったはずだ。

この女の子、この制服。どこで目にしたんだっけ。

少しずつ、少しずつ、記憶が甦ってくる。

「あ」

……思い出した。

地下鉄駅に向かう途中、この子が、見るからに柄の悪そうな若い男たちに囲まれていたんだ。

困っていたみたいだから、いつものクセでそれを助けて。

なんとなく成りゆきで、そのまま部屋に連れてきて。

その先はよく覚えていないけど、困ったことに、

微かな記憶の断片がある。

さらさらの髪、滑らかな肌の感触。

柔らかな舌。

熱く濡れた粘膜の感触。

可愛らしく、切なげな吐息。

……夢じゃ、なかつたんだ。

「……少し、思い出した。名前は……、えっと。

斐川……ひしかわ 笙子ちゃん、だっけ？」

「はい」

「えっと……部屋に戻ってからの記憶が曖昧なんだけど……」

「……沙紀さんがいきなりわたしに抱きついてきて、唇を奪ってベッドに押し倒したんです」

女の子 斐川笙子 は淡々と説明する。私

は思わず両手で頭を抱えた。

「ああああー、やっぱりっ？」

頭痛が、よりいつそうひどくなる。

まったく、なんてことだろう。

生まれてから二十一年間、まっとうに生きてきたというのに。

よりもよって、年下の女の子を襲ってしまう

だなんて。それも、こんな美少女を。

……いやいや、美少女だからこそかもしれない。同性の私が見ても、思わず見とれてしまうほどに可憐で、どこか儂げな微笑が魅力的だった。

「でもあなた、どうしてあんな遅い時刻にあんな場所にいたの？」

夜遊びをするようなタイプには見えないのに。

「あれじゃあ、襲ってくれと言ってるようなものじゃない」

「実際、襲われてしまいましたしね」

「うー！」

笙子の何気ない一言が、ぐさりと胸に突き刺さる。

そう、夜の盛り場を一人で歩いていた彼女を襲ったのは、スケベな男どもではなくてこの私なのだ。

「ゴメン！ほんつとーにゴメン！」

私はシートに頭を擦り付けるようにして謝った。謝って済むことではないかもしれないけれど。

「……済んだことだから、いいですけど」

笙子はぼつりと言った。

「その代わり、しばらく沙紀さんの家に置いて貰えませんか？」

「え？」

私は顔を上げる。

「どうして？あなた、家はどこ？」

口ごもって顔を逸らす、その様子でピンと来た。

「さては……家出？」

笙子の表情が、一瞬強張る。凶星らしい。

「ダメダメ。未成年の家出少女を匿うなんて、できるわけないじゃない。下手したら誘拐犯扱いされちゃう」

「駄目ですか？」

「ダメ！ちゃんと家に帰りなさい」

「……わたしのこと、レイプしたくせに」

上目遣いに、恨めしそうに私を見上げる。

「う……」

私は、窮地に追い込まれていた。なにしろ、決定的な弱みを握られているのだ。

いったいどうしたものだろう。考えがまとまらない。ふつか酔いによる頭痛が、思考の邪魔をしている。

「しばらく、ここにいさせてください」

「ええつと……。今、ふつか酔いで頭が痛いから……その話は後でってことで……。とりあえず

私は寝る！ 起きるまではいていいから」

これも一種の逃避。身体を丸めてタオルケットにくるまる。……と、頭の上で「ぐう」という音がした。

私は頭だけを外に出す。

「もしかして、お腹減ったの？」

笙子は恥ずかしそうに、こくりとうなずいた。
やれやれ。

「だったら、冷蔵庫の中のもの、好きに料理して食べていいから」

「……でも、あの……」

「何？ そのくらい、遠慮しなくていいよ」

「いえ、そうではなくて……その……、わたし……」

言いにくそうに、頬を赤らめている。

「……もしかして、料理ができないとか？」

そう訊ねると、笙子は小柄な身体をよりいっそう小さくした。

やれやれ、今どきの若い連中は……などと、年寄りじみたことを考えた私だったが、すぐに思い直した。

笙子のこの丁寧な口調。世間ズレしていない様子。あのクラシックなセーラー服。そして、料理もできないというのは……。

「笙子ってさあ……、ひよっとして、お金持ちのお嬢様？ 家にはお手伝いさんやコックがいて、家事は全部やってくれるとか？」

そして私の予想通り、笙子は小さく頷いたのだ。

仕方なく、ベッドから出て朝食を作ってあげた。
「美味しい。沙紀さんって、お料理がお上手なんですね」

笙子が嬉しそうに言う。しかし別に感心するほどのものではない。食パンが余っていたので、フレンチトーストを作っただけだ。

パンと、卵と、生クリーム。甘みと香りを付けるためにオレンジキュラソーをひとさじ。

それだけだ。まずく作る方が難しいというもの。

しかし笙子は素直に感心している。

「沙紀さんってすごいですね。お料理も上手で、そしてあんなに強くて……」

そう言うと、笙子は隣の部屋に目をやった。

視線の先には、壁に掛かった何枚かの賞状と、タンスの上に置いた盾。

いずれも、空手の大会のものだった。

そう。私は空手の黒帯を持っていて、昨夜、笙子に絡んでいた男たちを全員KOしたのだ。

「いや、まあ……そんな大したものじゃないよ」

「すごいですよ。男の人よりも強いなんて。こんな素敵な人、初めてです。だから、ここにいさせてくださいね」

「お世辞言ってもダメ。それとこれとは話が別」

「でも……」

「私も一応大人なんだから、未成年の家出に手を貸せるわけじゃないですよ」

「ずっと、ってという訳じゃないんです。しばらくの間……」

私は小さく溜息をついた。

「どうして……って、聞いていい？」

「……」

しばらく黙っていた笙子だったが、やがて、ぼつりぼつりと話し始めた。

笙子の家は、やはり相当な名家だった。会社名は伏せるが、毎年『企業ランキング』の上位に名前が載るような大会社を経営していて、お祖父さんが会長、父親が社長なのだそうだった。

父親も、そしてお祖父さんも厳しい人のようで、笙子は幼稚園から私立の名門校に入って、純粹培養のお嬢様として育てられてきた。

それが当たり前のことだから、親に逆らうなんてこれまで考えたこともなくて。

しかしそんな生活に疑問を感じたのが、親が決めた「婚約者」を紹介された時だったという。

十五歳で婚約者とはまだずいぶん早い気もするが、上流社会ではそういうこともあるのかもしれない。ごくごく平凡な地方公務員の家に生まれた私には、縁のない話だが。

「ヤな奴だったの？ 取引先のバカ息子とか」

それまで黙って聞いていた私は、つい口を挟んだ。笙子は首を左右に振る。

「いいえ。確かに取引先のご子息ですけど、とっても素敵な方でした。ちょうど、沙紀さんと同じくらいの歳の大学生で、背が高く、とつても優しくして」

「じゃあ、どうして」

「さあ、どうしてなんでしよう?」

笙子は自嘲めいた笑みを浮かべて首を傾げた。

「きつと、その方……高浜さんが素敵な方だったからではないでしょうか」

「は?」

今度は私が首を傾げる番だった。労せずして素敵な婚約者が手に入るなんて、いまいち男運のない私にしてみれば、羨ましい話だと思うのだけだ。

「高浜さんは素敵な男性で……。だけど、父が決めた婚約者です。わたしが自分で好きになって、選んだわけではありません」

「……」

「父も祖父も厳しい人ですけど、すべてわたしのためを思っていることだと思います。口では煩いこ

とを言っても、本当はわたしのことを可愛がってくれています。父なんて、実は親バカな方かもしれません」

「いいことじゃん」

ますます、私にはわからない。仕事が忙しかったり外に愛人がいたりで家庭や子供を顧みない父親、というのならよく聞く話だけだ。

「父の言う通りにしていれば、なにも間違いはないんです。これまでそう生きてきたし、それでわたしは幸せだったと思います。だけど……」

笙子はどことなく悲しそうな目をしていた。

「親に言われた通りに勉強して、親が決めた学校へ通い、そして親が選んだ男性と結婚する……それで幸せな生活を送れるのかもしれない。けど人から与えられた幸せって、本当の意味での幸せなのでしょうか?」

「……なるほど、ね」

ここまで説明されれば、なんとなくわかる。これまでずっと親の言う通りに生きてきて、その上結婚相手まで親が選ぶとあっては、一生「親から与えられた幸せ」の中で生きていくことになって

しまう。

学校なら、そこに通うのはせいぜい数年間。しかし配偶者となると、離婚しない限りは一生の付き合いになる。

おそらく笙子は、漠然と思っていたはずだ。今は親が敷いたレールの上を歩いていても、いずれ学校を卒業して社会人になれば、嫌でも自立しなければならぬのだ、と。

しかし、事情が変わってきた。まだ中学生のうち、結婚相手まで親が決めてしまったことで、一生「与えられた幸せ」の中で生きる自分の姿が見えてしまった。

「昨日は学校の登校日で、帰り道にそんなことを考えていたら急にいたたまれなくなつて……。一度くらい自分で道を決めて、自分の思う通りに歩いてみよう、って思つたんです。夏休みなんだし、少しくらい親に心配かけてもいいかなつて」

「……で、そのまま家出？ 家にも帰らずに？」

これには少し呆れてしまった。私は家出なんてしたことないからよくわからないが、普通、学校帰りにそう思つたら、一度家へ帰つて荷物をまと

めたりするものではないだろうか。

笙子は着替えも持たず、学校の制服のまま家出してきたのだ。しかも。

「しかも、いきなり北海道まで来る？ 東京から」

「どうせなら遠いところの方がいいかな、と。パスポートを持っていませんでしたから、海外というわけにはいきませんし、沖縄は暑そうですし。それにわたし、北海道は初めてなんですよ」

あつけらかんと言う。さすがお金持ち、庶民と感覚が違う。……というか、かなり天然入つてるかもしれない。

私は溜息をついた。

「あんたさあ、もうちよつと考えて行動した方がいいんじゃない？ 何の準備もなしに一人で見知らぬ土地へ来て、危ないと思わない？ その軽率な行動のせいで、……その、……バージン失くしたんだよ？ いや、私が悪いんだけどさ」

「でも、自分で決めた行動の結果ですから」

笙子はむしろ、満足げに微笑んでいる。

「これも一つの人生経験です」

「でも、その婚約者に怒られない？」

「怒られるのは、どちらかといえば沙紀さんかと」

「うっ」

「もちろん、父にも高浜さんにも秘密にするつもりですけど……。でも、沙紀さん次第でしょうか」

「うっっ……」

「こいつつてば天然ボケのふりして、実は意外と性格悪いかも。」

「……わかったよ！ ここにいてもいい。でも、夏休みが終わるまでだからね」

「ありがとうございます」

「につこりと笑って微笑む。この顔だけ見ていたら、まるで天使の微笑みなんだけど。」

「……でも、電話でも手紙でもいいけど、元気にして戻って家に知らせること。警察に捜索願いか出されちゃたまらないからね。いい？」

「はい」

「それともう一つ」

私にとってはある意味、こちらの方が大きな問

題だ。

「お金は持つてるの？ 自分の食費分くらいは出さないよ。私は貧乏学生なんだし、世の中そんなに甘くないんだからね」

私も一応、今時の女子大生。オシャレなどにはあまり興味ないとはいっても、やっぱりそれなりに出費は多い。親からの仕送りとささやかなバイト代だけでは、ほとんど余裕のない生活だ。扶養家族なんて養えるわけがない。

……しかし。

世の中、意外と甘いものらしい。少なくともお金持ちにとっては。

考えてみたら、笙子は気楽に東京から北海道へ来られるだけのお金を持っているはずだ。

「お金でしたら、これがありますから」

そう言つて笙子を取り出したのは、私には一生縁がないと思われる物。かの世界一有名なクレジット会社の、ゴールドカードだった。

その日の午後は、二人で買い物に出かけた。

笙子の着替え等を揃える必要があったからだ。

長身の私と小柄な笙子では身長が十五センチ以上も違うから、私の服を貸すというわけにもいかない。

笙子は本当に何も持たずに家出てきたのだ。

まあ、アメックスのゴールドカードがあれば他に何もいらぬ、という気もするけれど。

そして、冷蔵庫もほとんど空だった。二人分の食料を調達しなければならぬ。自分の懐が痛まないこのチャンスに、黒毛和牛のサーロインでも買っておこう。

買い物の途中で、笙子は家へ電話をしていたようだ。「えへ、怒られちゃいました」なんて笑っていた。それは当然だろう。

夕食の仕度は私の仕事だった。

純粹培養のお嬢様である笙子は、家事などほと

んどできないのだ。ここにいる間に、少し憶えさせようか。

私は料理は好きだけど、掃除はあまり好きではない。だから、笙子に掃除を押しつけられればいいな、なんて思っていた。幸い笙子は、嫌な顔ひとつせず嬉々として家事にチャレンジしていた。お嬢様にとつては、掃除や洗濯も物珍しい体験なのかもしれない。本人にやる気があるなら、二、三日で使い物になるだろう。

夕食の後、私はビールを飲みながらテレビを観て、この奇妙な同棲もけっこううまくやっているかな……などと考えていたのだが、一つ、見落としていたことがあった。

私の部屋には、ベッドが一つ。

お客さん用の布団なんてないし、人ひとりが横になれるほど大きなソファもない。

と、いうことは。

必然的に、今夜も一緒に寝るということだろうか。それはマズイかもしれない。

私は飲みかけの缶ビールをテーブルに置いた。

ビール一缶で酔うほど弱くはないが、昨夜あんな

ことがあったばかりだし、自重した方がいい。

ちょうどタイミング良くというか悪くというか、
笙子が大きな欠伸をした。

「ね、眠いの？」

そう訊ねる声が、少し緊張していた。

「ええ。そろそろ寝ようかと思うのですが……」

「……が？」

「パジャマを買うのを忘れてました」

うっかりしてました、と笑って言う。

「あの、予備のパジャマか何か、貸していただけ
ませんか？」

「あ……、う、うん」

私は寝るとき、いつも大きめのTシャツをパ
ジャマ代わりに着ている。それを貸してあげたん
だけど、私でも大きいんだから笙子が着ると本当
にだばだばだ。

下着一枚の上にTシャツを着る。肩と胸元が大
きく露出して、ちょっと……いやかなり、アブな
げな姿だった。

「沙紀さんは、まだ寝ないんですか？」

「え、っと……その……。まあ、そろそろ……」

寝るのはいいんだけど、「何処で」というのが問
題だ。普通に考えると、一つのベッドに二人が寝
ることになるんだけど、それは笙子が嫌がるかも
しれない。なにしろ昨夜、私に襲われているんだ
から。

ところが笙子は、私の心配をよそにあっけらか
んとしていた。

「沙紀さんのベッドは大きいから、二人でも寝ら
れますね」

先にベッドに横になって、うーんと伸びをする。
「えっと……、そ、そうだね」

笙子が何も気にしていないのに、私があればこれ
思い悩んでも仕方がない。枕は一つしかないので、
小さいクツションを持って私もベッドに入った。

部屋の明かりを消す。

それでも薄いカーテンの生地を通して街灯の明
かりが入ってくるので、室内はぼんやりと明るい。
窓をバツクにして隣りに眠っている笙子のシル
エットが、黒く浮かんでいた。

腕と腕が、微かに触れ合っている。

私は、不自然なくらいにどきどきしていた。と

ても眠れそうにない。

どうしてだろう。

隣りに人の温もりがあることに慣れていないわけじゃない。前の彼氏と一緒に寝ることだってしょっちゅうだった。

なのに何故、こんなに意識してしまうんだろう。自分のものではない香りが鼻をくすぐる。昼間買い物に行ったとき、笙子がいつも愛用しているシャンプーやボディソープ等を買ってきたのだ。私が使っている物の、三倍以上の価格だったのを覚えている。

無意識のうちに笙子の方を向いて寝ていた私は、少しだけ顔を近づけた。その分だけ、香りが強くなる。

(いい……匂い)

これが、笙子の匂い。そう思うと、胸の鼓動がよりいっそう強まった。

笙子は早々と眠ってしまったのか、行儀よく仰向けになって、静かな呼吸を繰り返している。

かなりささやかな胸の膨らみが、ゆっくりと上下している。

私はしばらく、そのまま笙子を見ていた。

どのくらいの時間だろう。五分か、それとも三十分か。

不意に、笙子が目を開いた。私の視線に気がついたのか、顔をわずかにこちらへ向ける。

目が、合ってしまった。

暗くてよくわからないが、小さく微笑んだように見えた。

「……眠ってた？」

「……少し、ウトウトしていたみたいです」

「あんた、よく平気で寝られるね」

「ええ。わたし、枕が変わるのは平気な方なんです」

わざとなのか天然なのか、見当違いの反応を返す。

「そうじゃなくて……。私のこと、怖くないの？」

「怖い？ 何故ですか？」

身体ごと、私の方を向いて訊いた。

「だって私、笙子のこと……その、レイプしたんでしょ？」

時間が経つにつれて、私もかなり思いだしていた。昨夜のアレは、確かにレイプと呼んでもいいものだった。何が起こったのかわからずにいる笙子を押し倒して、取り返しのつかないことをしてしまっただから。

「それは……そうですけど……。沙紀さん、しらふでもあんなコトするんですか？」

「するわけないでしょ！」

「じゃあ、今夜は安心ですね」

にこつと笑ってそう言うと、また仰向けに戻る。そのまま眠ってしまうのかと思つた頃、小さな声が聞こえた。

「……どうしてなんでしょう。ぜんぜん、怖くないんですよ。昨夜も、確かに驚きましたけど、何故かあんまりショックでもなくて……。どうしてなのかな」

囁くような声で言うと、ちらつとこちらを見た。

「これって変ですか？」

「……変」

お嬢様だから、感受性も庶民とは少し違うのかもしれない。

なんてことを考えながら、だけど私は少し安心していた。笙子の心に、拭いようのない傷を残していたら大変だから。

「こうして一緒に寝ていても、ぜんぜん不安なんてないですよ。むしろ……」

笙子は私の方を見て、目をそらして、また目を合わせて……という動作を繰り返した。何か、言にくいことがあるようだ。

「何？」

「あの、……もうちょっと、傍に寄ってもいいですか？」

「え？」

「なんていうかこう……隣りに人の温もりがあると、すごく安心して眠れません？」

「まあ……ね」

小さい子供みたいなことを言う……とも思つたけれど、否定はできない。

私も彼氏とラブラブだった頃は、ぴったりと寄り添って眠るのが好きだった。それに笙子の場合、生まれて初めて親に逆らって見知らぬ土地に来て、不安もあるのかもしれない。

「なんなら、腕枕でもしてあげようか」

冗談のつもりで言ったのに、笙子は恥ずかしそうに頷いた。これでは後に退けない。

ぴったりと身体を寄せてくる笙子の頭を少し持ち上げて、腕を下に入れる。何が楽しいのか、笙子はくすくすと笑った。

「やっぱり少し、どきどきしますね」

「じゃ、止める？」

そう訊くと首を横に振る。

「今夜は、気持ちよく眠れそうです」

「昨夜は、眠れなかった？」

「……ええ。明け方になってようやくウトウト

と」

「そう」

そりゃそうだろう。そうでなきゃ変だ。私はむしろ安心した。

先刻までの動悸も、いつの間にか治まっている。

やがて、静かな寝息が聞こえ始めた。

笙子の顔が、すぐ横にある。

無防備な寝顔は、やっぱり可愛い。

(やっぱり、襲っちゃおうかなあ)

何気なく浮かんだその考えを、慌てて振り払う。私ってば、何を考えているんだ。私はノーマルだったはずだ。

少なくとも、一昨日までは。

(私はノーマルだ、私はノーマルだ、私はノーマルだ……)

……。ただ……。

あの可愛い喘ぎ声をもう一度聞きたいって、心のどこかが思っている。

(襲っちゃダメ、襲っちゃダメ、襲っちゃダメ、襲っちゃダメ……)

念仏のように唱えているうちに、いつしか私も眠りに落ちていった。

少し、エッチな夢を見ていたような気がする。ただど具体的にどんな夢だったのか、まるで思い出せない。

朝、目を覚ました時。

私たちは、抱き合うようにして眠っていた。幸い、パジャマ代わりのTシャツはちゃんと着たままだったけれど。

しかし。

今は、八月なのだ。

私の部屋は東側に窓があつて、朝陽がまともに射し込む。

当然の結果として、目覚めた時は二人とも汗びっしょりだった。北海道の一般家庭でクーラーのあるところは少ないし、さして裕福でもない女子大生の安アパートとなればなおさらのこと。

「シャワー、借りてもいいですか？」

この状況、お嬢様にはさすがに耐え難いもので

あるようだ。きっと普段は空調の効いた部屋で、羽毛布団にくるまって寝ているのだろう。

「いいよ。私も続けて使うから、片付けなくてもいい」

「はあい」

昨夜も使ったバスタオルを手にした笹子の姿が、バスルームに消える。私は汗で湿ったTシャツを脱いで、とりあえずそれで身体を拭いた。そのまま裸で、もう一度ごろりとベッドに横になる。

バスルームからは、水音が聞こえている。

私はぼんやりと、今日の朝食は何にしようかと考えていた。昨日がフレンチトーストで夜がステーキだったから、和食が食べたいと思う。けど笹子は納豆なんて食べられるだろうか。鮭の切り身の塩焼きというのも、いまいち似合わない気がする。

そうこうしているうちに水音が止んだので、私は立ち上がった。

丸めたTシャツを洗濯物入れに投げ込むのと、バスルームの扉が開くのが同時だった。

「はあ、気持ちよかった。沙紀さんも……、あ」

バスタオルを身体に巻いて出てきた笙子は、何故かそこで口をつぐむと、真っ赤になって俯いてしまった。

「……………？ 何でしたの？」

「いえ……………なんでも……………」

一度熱いお湯を浴びた後で、水を浴びたのだからか。笙子の白い肌が、淡いピンク色に染まっている。笙子愛用の高級なボディソープとシャンプールの淡い香りが、媚薬のように私の鼻を刺激する。

「あ……………」

笙子が、小さく声を上げた。

私はほとんど無意識のうちに、笙子の身体を抱きしめていた。

ぎゅっと腕に力を込めて、笙子の髪に鼻を押しつける。

「……………いい、匂い」

決してきつすぎることはない香料の、柔らかな香り。洗ったばかりの髪の匂い。そして、湿った肌の匂い。

身長差があるので、笙子は私の胸に顔を押しつ

けるような態勢になっていた。

笙子は何も言わず、ただ黙って身を固くしている。小柄で華奢な身体つきだから、私の腕の中にすっぽりと収まるような感じだ。

私はそのまましばらく、笙子の匂いと柔らかな肌の感触を楽しんでいた。

腕の中で、笙子は小さく震えていたようにも思う。

「沙紀……………さん」

小さな、本当に小さな声で囁いた。

「……………痛い……………です」

「え！ あ、ご、ゴメン！」

その声で我に返った。自分で思っていた以上に、腕に力を入れていたらしい。

もしかして、とんでもないことをしたのでは？

私は慌てて、笙子を放した。

手が引つかかったのか、身体に巻いていたバスタオルがはらりと落ちる。笙子は一糸まとわぬ姿で、私の前に立っていた。

「あ、ご、ごめん！ 私ってば、つい……………」

笙子はバスタオルを拾おうとも、手で隠そうと

もせず、その場に立ちつくしていた。突然の出来事に驚いて、身体が硬直しているのかもしれない。小ぶりな胸も、その先端にあるピンク色の突起も、そしてわずかに生えた恥毛も、すべてが露わになっていた。

ウエストなんて、力を入れて抱きしめたら折れそうなくらいに細い。

「あ……あの……」

笙子の声が、ほんの少し震えている。当然だ。

しらふなら大丈夫と信用していた相手に、いきなりこんなことをされては。

しかもこの時になってから気付いたのだが、先刻Tシャツを脱いだ私は、ショーツ一枚の限りなく全裸に近い姿だった。気ままな独り暮らしのクセが身体に染みついていて、つい、いつも通りに行動してしまった。

これでは、笙子を襲おうとしたと思われるも言い訳できない。

「……沙紀さんって、やっぱり……?」

「……いや……その……、笙子の洗い髪がすごくいい匂いで、つい……」

ああ、ぜんぜん言い訳になってない。

「……ゴメン。私、どうかしてた」

「……いきなりこんなことされたら、びっくりします」

「……ゴメン」

「せめて……先に一言断ってください」

「え?」

私はびっくりして、笙子の顔を見た。この言い方では、まるで……。

「……断れば、いいってこと?」

「もしかして沙紀さん、エッチなこと考えてます?」

あ、なんだか笙子の視線が白い。

「え? いや、いや。まさか!」

一瞬きついで睨んだように見えた笙子は、すぐににこつと笑った。

「……いきなり脅かすようなことしないなら……、抱きしめるくらいはしてもいいですよ」

「え? あ……いや、とにかく、ゴメン!」

なんだかすごく居心地が悪くて、私はそのまま逃げるようにバスルームへ入った。

* * *

まだ、心臓がドキドキしている。

腕に、笙子の肌の感触が残っている。

柔らかくて、吸い付くように滑らかで。

そして、いい匂いがしていた。

(私ってば……)

記憶の残滓を洗い流そうとするかのように、私は蛇口を一杯にひねって頭からシャワーを浴びた。顔が痛いほどの水勢だ。

私は、同性愛者ではない。……はずだ。多分。

なのにどうして、あんなことをしてしまったのだろう。

頭で考えるよりも先に、身体が動いていた。

バスタオル一枚の笙子が、とても可愛く思えて。

気がついたときには、抱きしめていた。

まるで、その姿に欲情したかのように。

(そんな……ばかな)

確かに笙子は可愛い。しかしだからといって。

(……可愛かった)

私の腕の中で、赤くなって震えていた笙子。

思い出すだけで、胸の鼓動が激しくなる。

(笙子の裸を見て、笙子を抱きしめて、私、興奮していた……?)

そんな莫迦な。認めたくない。

だけど、否定できない事実が一つあった。

私は恐る恐る、指を下腹部へ滑らせた。その事実を確かめるのが、怖かった。

だけど。

(濡れてる……)

疑いようもない。人差し指と薬指で花弁を開き、少しだけ中指を潜り込ませる。

そこには、普段の状態とは明らかに違う潤いがあつた。熱く、とろけている。

(どうして……)

そのまま、指を離すことができなかった。

身体の芯が熱い。

私の女の部分に、ぽつと火が点いた。

こんなこと、いけない。頭ではそう思う。こ

んな朝っぱらから、シャワーを浴びながらの自慰行為だなんて。しかも、部屋には笙子がいるとい

うのに。

なのに私は、指を離すことはできなかつた。それどころか、無意識のうちに指を小刻みに動かして、中へ潜り込ませようとしていた。

ふと思いついて、シャワーを胸に当てる。水勢を最強にしたシャワーは、私の乳首を絶え間なく刺激した。

「あ……、う……あ」

声が漏れてしまう。指で触れてみると、そこはもう固く尖っていた。

(そんな……)

私はこれまで、どちらかといえばスロースターターだと思っていた。一度その気になってしまえばそれなりに激しく反応するのだが、そのためには彼氏にたっぷり時間をかけて愛撫してもらう必要があつた。

自慰だつて、そう頻繁にする方ではない。その行為自体は決して嫌いではないのだが、本気で気持ちよくなるまで時間がかかるので、よほど時間に余裕があつてエッチな気持ちになつているときにしか、する気になれないのだ。次に彼氏と会う

までの二、三日くらい、我慢してもいいと思つてしまふ。

なのに、今日はどうしたことだろう。もうすっかり、止められない状態になつている。

さすがに花弁に触れている指をすぐに挿入するのは躊躇ためらわれたので、もういつでも入れられそうではあつたが、胸の方に意識を集中する。

流水の刺激だけでは物足りなくなつて、ノズルを直に押しつけた。プラスチック製のノズルと乳房の間で、乳首が押しつぶされる。そのまま小さな円を描くように動かすと、ざらざらとしたノズルに擦られて、水とは比べ物にならない強い刺激が味わえた。

「あ……はあ……」

気持ちいい。もともと私は、火がついた後は乳首がすぐく感じるのだ。堪えようとしても声が漏れてしまふ。

「ううん……う……ん……、いい……」

部屋には笙子がいるのだから、大きな声を出すわけにはいかない。しかしシャワーの水音が大きいから、少しくらいなら気付かれることはあるま

い。

私は夢中になって、シャワーを胸に擦り付けていた。

固いプラスチックの感触は少し痛い。けどその痛みは、次の瞬間には快感へと昇華してしまう。

「あん……だめ……」

こんな固い物をいつまでも擦り付けていたら、乳首が擦り剥けてしまうかもしれない。適当なところで止めないと……と思っても手が止まらない。

右の乳首をしばらく愛撫して、痛みが強くなってきたら次は左へ。左の乳首も痛くなってきたら、また右へ。

私は繰り返し、胸への愛撫を続けていた。

「……だめ……、これ以上は……あ」

なんとか自分に言い聞かせて、シャワーを離す。見ると、乳首が赤くなっている。これ以上続ければ、本当に擦り剥いてしまいかねない。

けどさすがに火照った身体は、代わりにもっと強い刺激を求めている。

「もう……」

私は脚を広めに開くと、そこへシャワーを当て

た。

「ああっ！ ……っ」

一瞬大きな声を出してしまい、慌てて口をつぐむ。

一杯に蛇口を開いたシャワーの水勢が、乳首よりも敏感な部分に当たって、身体に電流が流れたように感じた。十五センチほどの距離を空けて、ゆっくりとシャワーを動かす。

「はああ……ああ……ああ……」

いい。

すごくいい。

こんなの初めて。

脚から力が抜けていく。私はタイルの上にぺたんと座り込んだ。

「ひゃあああっっ！」

その勢いで、先刻からずっと第一関節だけを潜り込ませていた中指が、奥まで入ってしまった。

突然の刺激に、思わず悲鳴を上げた。

「あ……ああ……あ……」

中は、すごく熱い。まるでインフルエンザにでもかかって高熱を出しているみたいだ。

もうすっかり柔らかくほぐれて、自分の指を
びったりと包み込んでいる。

濡れている、なんてもんじゃない。フライパン
で熱したバターのように、中の熱さで膣壁が溶け
だしているんじゃないかって、一瞬本気で思った。

「ああっ、ああん！ ああっ！ ああーっ！」

一度入れてしまつたら、もう指が止まらない。

一本の指ではすぐに物足りなくなつて、薬指も中
に入れた。

指を二本挿入すると、さすがに膣口が大きく広
げられて、挿入されてるつて実感がある。二本の
指を交互に動かして、絡みつく粘膜をかき混ぜる。

「すっ……ごあい……。いい……。いい……」

もう、今にも達してしまいそうだ。だけど心の
どこかで、すぐにいつてしまつたら勿体ないつて
思っている。

こんなに気持ちいいのだから、もつと楽しんで
いたい、つて。

「うんっ…… ああっ！ うんっ！ んっ、
はああ……」

指を根元まで埋める。それでも物足りないかの

ように、ぐいぐいと手を押しつける。

中指の先端は、一番深い部分まで届いていた。

右手と腰が、タイミングを合わせてリズムカル
に動いている。

私は左手に持っていたシャワーを放り出すと、
胸をギュツと掴んだ。指がめり込むほどに、こね
回すように強く揉む。

右手は、中指と薬指を中に入れたまま、人差し
指と親指でクリトリスを摘んだ。指の腹できゅつ
と挟んで、軽く引つ張つたり、左右に転がしたり。

「あああっ！ ああっ！ あああんっ！」

いく。

いつちやう。

もう我慢できない。

だけど、もつと楽しみたい。

もつと気持ちよくなりたい。

ふと、瓶子が使つたボディソープの容器が目
映つた。私はそれをたつぷりと掌に取ると、又ル
又ルになつた手で、胸と性器を強く擦つた。

「ああああっ！ はあああああっ！」

効果はてきめんだつた。

まるでローションのような滑り。

そして心地良い香り。

笙子の匂いに包まれて、私は快感の頂に達していた。

* * *

当然の事ながら。

バスルームから出た後、笙子の顔をまともには見られなかった。

笙子をオカズにして……してしまった。

すごく気まずい。

目を合わさないようにして、冷蔵庫から烏龍茶を取り出そうとしたのだが、私の手は途中で止まった。

笙子の身体に、目が釘付けになる。

彼女は全裸のまま、ベッドに座っていた。

バスルームから出た私を見ると、立ち上がってゆっくりと近付いてくる。

私の目の前。一メートルくらいのところまで来て。

黙って、無表情に私を見ていた。

「……どうですか？」

「ど、どうって、何が？」

私はどもりながら訊き返す。

「わたしがこうしていたら、また襲っちゃいますか？」

まったく隠そうともせず、腕を広げる。

「そ、そんなことするはずないでしょ！」

「本当に？」

「あ、あ、当たり前よ！」

「わたしが嫌がること、しません？」

「しないしない」

首を左右に振りながら、私は頭の片隅で考えていた。

もしもここで正直に「自信がない」なんて答えたら、笙子はどうするのだろう。怯えて、ここから出ていってしまうのだろうか。

「じゃあ、わたしはまだ、ここにいていいんですね」

にこつと微笑むと、笙子はベッドの方に戻って自分の下着を手に取る。その姿を見ながら、私は

小さく安堵の息をついた。

私は笹子に、ここにいて欲しいと思っていた。

「私、今日は午後からバイトなんだけど……… 笙子はどうする?」

「アルバイトって……… なんのですか?」

行き先を告げると、笙子は楽しそうに微笑んだ。

「わたしも、見学に行つていいですか?」

あまり気は進まなかつたけれど、それをダメという理由は思いつかなかつた。

* * *

「あれ、珍しいね。沙紀さんが同伴出勤なんて」

後輩の静内彩樹しずないさいきが笑いながら言う。

「誰が同伴だつて? 従妹いとこよ、従妹。夏休みで遊びに来てるの」

もちろんこれは嘘。笙子を連れていけば、必ず

「誰?」と訊かれることになる。その時のために考えておいた言い訳だ。本当のことを言うわけにはいかないから。

「従妹? へえ、可愛い子だね。名前は?」

目を爛々と輝かせている。きっと内心、舌なめずりをしているに違いない。

彩樹さいきは一見、精悍な美少年といった外見だが、中身はれつきとした女子高生だ。ただし性格はある意味、非常に男性的である。

(もしかして、知らないうちに私も影響されてたのかな……)

そんなことを考えてしまう。

彼女は自他共に認める百合で、同性に異様にもて、中学生の頃から「バージンキラー」の異名を持つていたほどののだ。

「言つとくけど、笙子にちょっかい出すんじゃないよ!」

「笙子、ね。上品っぽくていい感じじゃん。あーゆー子をひいひい言わせるのが楽し……」

「彩樹!」

「冗談だつて。いくらなんでも、沙紀さんの身内にまで手は出さないよ」

嘘だ。こいつは絶対本気だ。

長い付き合いだからよくわかっている。彩樹は、美少女にはまったく見境がないのだ。

「手え出したらマジで怒るよ！」

きつちり釘を刺しておく。彩樹には、相手の気持ちに関係なく強引に襲うようなところがあるから、油断はできない。

だから、ここには連れて来なくなかったんだ。こいつがいるから。

私のバイト先は、女子大生の職場としてはちょっと変わったところだった。

実はここ、私が通う総合空手・北原極きょく闘流とうりゅうの道場なのだ。私は一応この女子では一番の実力者ということになっているので、自分の稽古の合間に、小学生と中学女子に対しては指導員もしている。

一番の実力者、といったが、実際のところ彩樹とはほとんど差がない。ただ、私の方が年上であることと、彩樹が性格的に指導員に向いていないというだけのこと。彩樹に中学女子の世話なんかさせたら危険だということを、師範もよくわかっているのだろう。

もつとも、笙子を襲ってしまった私には彩樹を悪く言う資格はないのだが、少なくとも私は手当たり次第に襲ったりしないし、悪いことをしたと反省もしている。

私は師範に事情を話して見学の許可を取ると、小さな折り畳み椅子を持ってきて、笙子を壁際の邪魔にならない場所に座らせておいた。

退屈なんじゃないか、とも思ったが、笙子はこのこと稽古風景を見ていたようだ。時々、彩樹が手を振ったりしていたのがちょっと癪に障ったが。

* * *

「沙紀さんは、どうして空手を始めたのですか？」

稽古が終わった帰り道、笙子が無気なく訊いてきた。

「少し、意外な気がするんです。沙紀さんって背は高いけど細身ですし……。どちらかといえば、体育会系というよりも文系の雰囲気がありますよ

ね」

「うん……、まあ、そうかなあ」

確かに、初対面の相手にはよく言われる。格闘技なんかやっているように見えない、と。

私は背は高いが線は細いし、外見も性格も、どちらかといえば地味な方だ。

「空手を始めたのは、高校に入ったばかりの頃だっただけ……」

中学の頃から、運動神経は悪くなかった。

勉強の方も、一応上位の成績をキープしていた。容姿だつて、とびつきの美人とは思わないけれど、まあ十人並み以上はいると思う。

それが、進藤沙紀という人間だった。

「自分を、変えたかったのかな」

「……？」

何をやっても、人並み以上にはできる。だけど

「これだけは誰にも負けない」というものはない。すべてにおいて、そこそこの成績で。

それはむしろ、地味な存在でしかない。

どちらかといえば大人しい性格も災いして、私は目立たない存在だった。なにか一分野で飛び抜

けて秀でている者の方が、周囲の注目を集めるものだ。

私は、悪い意味で「優等生」だった。

そんな自分が好きではなかった。

自分を変えたいと思っていた。

そんな思いは、高校へ進学した頃が一番強かったと思う。

その頃の私は、きっかけを探していた。

そんな時にたまたま、電機屋の店頭のテレビに映っていた女子空手の試合が目にとまった。

すぐく、格好良く見えた。

自分もあなりたいた。そう思った。

「それで、学校の近くにあった極闘流の道場に入門したんだ。でも……」

「でも？」

「けつこう、才能はあつたんだと思う。上達して、全国大会でも勝てるようになって……。でも、人の性格ってそう簡単に変わらないんだよね。やっぱり私って、いまいち地味でさ。彩樹や美樹のよいうな『華』がないっていうか。あ、北原美樹って、知ってる？」

笙子は首を左右に振った。格闘技を志す女子の間では知らない者のいない名前だけど、笙子が知らないのは当然だろう。

「極闘流の総帥のお孫さんなんだけど、女子格闘技では世界最強って言われている人でね。とにかくすごい強いんだ。傍に立っただけで、鳥肌が立つくらいに迫力と存在感のある人」

私も、ああなりたかった。

北原美樹のように、強く、そして魅力的に。

「ええっと……沙紀さんって、今でも十分に格好よくて、……素敵だと思います」

面と向かって言うには恥ずかしい台詞だと思っただのか、笙子は並んで歩いている私の顔は見ずに、真っ直ぐ前を向いていた。

頬が、ほんのりと赤くなっている。

「……ありがとう」

どさくさに紛れて、私は笙子の手を握った。

「あの子、沙紀さんの従妹いとこだなんてウソだろ？」

空手の稽古を終えてシャワーを浴びている時、隣の個室からそんな声が聞こえてきた。後輩の彩樹だ。

不意うち、私は必要以上に狼狽してしまった。「な、なんでっ？」

すぐに応えは返ってこない。隣の水音が止まり、扉が開く音がした。私も急いでバスタオルを身体に巻いて個室から出る。

彩樹は全裸のまま、隠す素振りも見せず濡れた髪を拭いていた。胸も小さく、女性らしいふくよかさのないすらりとした身体は、どこか中性的な印象を受ける。

「あの子いつも、ハート型の目をして沙紀さんのこと見てるじゃん」

髪を拭きながら、彩樹がにやりと笑う。私の反応を楽しんでいるような目つきで。

「もう一目瞭然。見るからに『恋する乙女』って感じ」

「そ、そんなこと……」

まさか、そんなことはないだろう。私と笙子は、別に恋人同士ではない。家出少女が他に行く当てがなくて、居候しているというだけのこと。

ただそれだけ……のはずだ。

「それに、オレがあの子に手を出そうとした時の沙紀さん。あれは保護者じゃなくて恋人の反応だよ」

私は、なんとか平静を装おうとした。しかし、顔が赤くなってきたのを自分でも感じる。

「それとも沙紀さん、百合だけじゃなくて従妹いとこ相手の近親相姦？ 見かけによらずアブノだねえ」

からかうように言って笑う。

だめだ、コイツには勝てない。彩樹は年下だけど、恋愛やセックスに関しては私よりもずっと経験豊富なのだ。但し、相手は同性限定だけだ。

私は、仕方なくうなずいた。

「……他の人には言わないでよ」

「言わないって。それにしても、沙紀さんも同類だったとはね。仲間が増えて嬉しいよ、オレは」

「仲間？」

私は思わず顔をしかめた。

「仲間って、一緒にしないでよ。私はあんたみたいに無節操じゃないんだから」

「笙子ちゃん一筋ってわけ？ 沙紀さんてば、かーわいい」

ああもう、完全に子供扱い。遊ばれてる。私は真っ赤になって、何も言い返せずにいた。

* * *

その夜。

お風呂上がりの私は、濡れた髪もそのままに風呂上がりのビールを楽しんでいた。

笙子は私の後にお風呂に入っていて、シャワーの水音が聞こえている。

その音を聞いているうちに、鼓動が大きくなってくるのを感じた。

考えまいとしても、シャワーを浴びている笙子の姿を思い浮かべてしまう。

ふと、夕方の、彩樹の台詞を思い出した。

『あの子、ハート型の目をして沙紀さんのこと見

てるじゃん。見るからに『恋する乙女』って感じ』

本当だろうか。そんなことがあるのだろうか。

だったら私たちは両想い。抱きしめたり、キスしたり、あるいはそれ以上のことをしたって問題ないはずだ。

だけど、彩樹の思い過ごしということもある。強引にバージンを奪った相手を、好きになったりするものだろうか。

ひよっとして、笙子ってマゾツ気があるのかも……。いやいや、まさか。

だけど、嫌がりもせずに一緒に暮らしているってことは、実は少しは期待しているのかな。

いや、でも……。

私の頭は混乱する一方だった。

もっと、笙子の傍に寄りた。

笙子に触れたい、抱きしめたい。

そう思っている。

だけどそれを拒まれたら、私はどうすればいいのだろう。

かといって、いつまでもこんな中途半端な状態

でいられる自信もない。

空になつたアルミ缶が、手の中でくしゃっと潰れる。それをゴミ箱に放り込んだところで、バスルームの扉が開いた。

白いバスタオルを身体に巻いた笙子が出てくる。その姿を見た瞬間、私は心を決めていた。

お風呂上がりの笙子は可愛すぎる。上気した肌も、濡れた黒髪も、これ以上はないくらいに私を挑発している。

もうこれ以上、我慢したくない。それとも、我慢できないというべきだろうか。

自分の気持ち、はつきり言うべきだ。そうしないとこの先、笙子との関係がぎくしゃくしたも
のになりそうな気がした。

「……笙子、ちょっとこっちに来て」

「はい？」

半疑問形の返事をしながら、笙子がこちらに来る。

「ちょっと、隣に座って」

笙子はバスタオル一枚の姿のまま、私の言葉に従った。

どことなく訝しげな表情で、私を見ている。今のところ、怯えた様子や疑っている様子は見えない。

私は、小さく深呼吸した。

「……なんですか？」

「前に、言つたよね？ 前もって断れば、いきなりじゃなければ、抱きしめるくらいはしてもいいって」

「え……？」

一瞬驚いた表情を見せた笙子は、数日前の朝のことを思い出したのか、頬を真っ赤に染めて俯いた。

何も言わない。ただ黙って俯いているだけ。

顔だけではなく、耳まで真っ赤になっている。

最初の一步を踏み出した私は、自分でも驚くくらい積極的になっていた。笙子の返事を待たず、次の行動を起こした。

「嫌なら、そう言つて。乱暴なことはいらないから」

笙子が何も言えずにいるので、沈黙は肯定の証と自分に都合のよい解釈をする。私は、笙子の身

体に腕を回した。

最初はそうつと。そして少しずつ力を込めていく。

顔を、笙子の髪に押しつける。

「いい……匂い」

耳元で囁くと、笙子の身体が小さく震えた。

笙子の体温を感じる。二人を隔てているものは、一枚のバスタオルと、私が着ている薄いTシャツだけ。

背中側に回した手を動かして、笙子の肩越しに頬に触れる。少し力を込めて、俯いていた顔をこちらへ向かせた。

驚き。戸惑い。ほんの少しの怯え。照れ。

様々な感情が複雑に入り混じった表情が見える。

「可愛いね、笙子」

もう一度耳元でささやくと、長い髪を掻き上げて耳たぶにキスをした。そのまま、唇で軽く噛む。「ん……」

笙子が小さく声をあげる。それでもまだ、私を拒絶する言葉は出てこない。

少しずつ、笙子に体重を預けていく。その分、

笙子の身体が後ろに傾いていく。

そのまま、絨毯じゅうたんの上に押し倒した。笙子が負担に感じない程度に体重をかけて、身体を重ねる。

頬と頬が触れる。二、三度頬を擦り合わせてから、その部分にキスをした。さらに頬の上で唇を滑らせる。

「あ……そ……」

開きかけた笙子の口を、私の唇が塞いだ。さすがに小さく身じろぎをしたが、私にしっかりと抱きしめられているために逃れることはできない。

唇と唇が、重ねられている。柔らかな粘膜同士が触れ合っている。

私は舌先で笙子の唇をくすぐり、そのまま口中へと滑り込ませた。

温かくて、柔らかくて、湿った感触。

私の舌が、笙子の舌に触れる。一瞬逃げるように引つ込められた舌は、二、三秒後に元の位置へと戻ってきた。もう一度触れても、今度は逃げない。私は絡ませるように舌を伸ばし、笙子の唾液を味わった。

一度舌を引つ込めて、また伸ばして。

笙子の唇、齒、舌。それぞれの異なる舌触りを楽しむ。

ゆっくりと唇を離すと、二人の間で唾液が透明な糸を引いた。

「笙子って、これまでキスの経験は？」

訊くと、笙子は目を閉じたまま小さく首を左右に振った。すると、私がファーストキスというわけだ。その事実満足感を憶えた。

もう一度唇を重ねる。

今度はキスだけではなく、左手をバスタオルの上から笙子の胸に乗せた。

胸をゆっくりと揉もうとしたその手に、笙子の手が重ねられる。私の手を押さえるかのように、少し力が込められている。私は動きを止めた。

「どうして……」

これだけ接近していても、ようやく聞こえるくらい小さな声だった。

「なに？」

「どうして……ですか？」

質問の意図はやや不明確だったが、私は「どうしてこんなことをするのか？」という意味に受け

取った。ただ、それが拒絶の言葉なのか、単に疑問に思っただけなのかはわからない。

「どうしてもなにも……笙子のことが、好きだから」

「え……」

笙子の手から、一瞬力が抜けた。その隙に私は、手をバスタオルの中に潜り込ませた。

絹のように滑らかな笙子の肌に、直に掌が触れる。

「好きだから抱きしめたい。触りたい。キスしたいの。笙子はまだ知らないかもしれないけど、好きな人と肌を合わせることが、本当に気持ちいいの」

そう言って、私はバスタオルを取った。上気してほんのりとピンク色に染まった肌が露わになる。手も脚も、そしてウエストも、力を入れたら折れそうなほどに細い。ほくろの一つも見当たらない、滑らかで真っ白な肌。

「ヤダ……」

笙子は両手で顔を覆った。

しかし私は、その「ヤダ」を拒絶の言葉とは受

け取らなかつた。ただ、全裸を人目に晒すのが恥ずかしいだけだろう。

ゆっくりと、笙子の身体を観察する。

中学三年生としてもやや小振りな、しかし形のいい乳房。その先端の突起は周囲の肌に比べて、やや濃いピンク色をしている。

そつと、指先で触れた。指はそのまま胸の膨らみを下り、お腹の上を滑る。お臍の横を迂回して、さらに下へと向かつて行く。

その部分もまだ未成熟で、ほとんど無毛に近かつた。微かに色の濃くなつた産毛が、ごく狭い範囲を覆っている程度でしかない。

相手が、まだ本当に未成熟な少女なのだと実感する。すごく、いけないことをしているような気になる。

だけど、止める気はなかつた。

「私は、笙子のが好き。それが私の片想いでしかないのなら、本当に嫌なら、そう言って。だけどただ恥ずかしいってだけなら、このまま続けるよ」

笙子は手で顔を覆つたまま、小さく首を振つた。

「嫌なの？」

もう一度、同じように首を振る。

「じゃあ、どうして欲しいの？」

真上から顔を覗き込むようにして訊く。すると突然、笙子の腕が私の首に回された。そのまま、ギョツと抱きしめられる。

「……こんなところで……ヤです。……せめてちゃんと、ベッドの上で……」

私は小さく笑つた。言われてみればその通りだ。経験豊富な相手ならば、たまにベッド以外の場所で気分を変えて……と思うこともあるが、まだほとんど経験のない笙子を、絨毯の上で押し倒してそのまま行為に及ぶというのは、ちよつとやり過ぎだろう。

私は身体を起こして、軽い笙子の身体を両腕で抱き上げた。全女性の憧れである「お姫様抱っこ」の形になる。

笙子は恥ずかしそうに、私の腕に顔を埋めるようにしている。できるだけそつと、ベッドの上に降ろしてやった。

「それから……明かり、消してください。恥ずか

しい……です」

また両手で顔を隠して、笙子がささやく。ただ私は、その願いは聞き入れなかった。

「それはだめ」

「どうして」

「笙子の、きれいな身体を見ていたいから」

私はベッドの縁に腰掛けて、笙子を見おろしながら応えた。

「ヤダ、だめ！ 沙紀さんのいじわる！」

慌てて胸を隠そうとする手を、私はしっかりと掴まえた。両手を開かせて、笙子の上に覆いかぶさる。

「いまさら言っても手遅れだよ」

別に苛めたいわけではないが、笙子の恥ずかしがる姿は本当に愛おしいのだ。それに適度な羞恥心は、快感を増すスパイスでもある。

私は身体を重ね、笙子の頬にキスをした。

「本当に、いい？」

ようやく笙子は、こくんとうなずいた。やっぱり恥ずかしいのか、目を伏せて、私の方を見ようとしない。

「ただ……」

「ただ？」

「……優しくしてください。初めての時は、

ちよつと乱暴でした」

「痛かった？ ゴメン。今度はちゃんと……」

そこでいったん言葉を切って、耳元に口を寄せた。

「うんと、気持ちよくしてあげる」

笙子の顔が、かあつと赤く染まる。

その様子を見届けてから、私はもう一度唇を重ねた。

私は何度も何度も、キスを繰り返した。
ついでにむようなキス。

唇を重ねながら、片手は笙子の胸をまさぐって
いた。

小振りな乳房を掌で包み込んで、優しく揉む。
あるいは、乳首を指先でつついたり、軽く摘ん
だり。

私がされる側だとしたら、ちょっと物足りない
ような愛撫。

だけど相手は初心者の子。どれだけ気を使っ
ても、使いすぎということはないだろう。

最初の頃は、胸はあまり感じないはず。自分の
経験を振り返っても、胸への愛撫が本当に気持ち
よくなってきたのは、初体験からずいぶん時間が
たった頃だ。

それ以前の段階では、胸への強い刺激は痛みで
しかない。

今の私は、相手に快感を与えるためというより
も、自分が触りたくて笙子の胸を愛撫している。

だから、乱暴なことはできない。

キスを続けながら、左で右の乳房を愛撫する。

しばらくして身体を少しずらし、今度は右手で左
胸を。

それぞれ、うんと時間をかけて揉みほぐしてい
く。

唇で塞いだ笙子の口から、時折、微かな声が漏
れた。

一度、唇を離れた。笙子はそれが不満なのか、
少し未練がましい瞳で私を見ていた。

なだめるように人差し指で笙子の唇に触れ、首
筋に唇を押しつける。そのままゆつくりと、下へ
移動していった。

控え目な胸の膨らみの上を、唇が滑ってゆく。
頂上へたどり着くと、そこにある突起を口に含
んだ。

「あ……」

小さな声上がる。

軽く、吸う。

先端を舌先でくすぐる。

笙子はくすぐったそうに身体をよじった。

「や……あ……、あつ……」

乳首への愛撫を続けながら、手はもう一方の胸を包み込む。

少しずつ、笙子の呼吸が荒くなってくる。

これまでよりも、少し強めに吸ってみた。

「ああ……つ。……はあ……あつ……ん……」

切ない声が、少し大きくなる。

つんと固くなった小さな突起を、唇で噛む。

そのまま軽く引つ張って、放した。

一瞬間にしわを寄せた笙子が、はうつと息を吐き出す。

「私、最初の夜もこんなコトした？」

笙子が小さくうなずく。

恥ずかしそうに。

「もつとして……欲しい？」

また、うなずいた。今度は躊躇ためらいがちに。

私は小さく笑って、今度は反対側の胸に顔を寄せた。

先ほどと同じ愛撫を、こちらの乳首にも繰り返す。

「はあ……ん……」

甘ったるい、切ない吐息。本当に可愛い声だ。

こんな声を聞かされたら、同性愛の趣味がなくなつてその気になってしまう。

そう、笙子が可愛すぎるから、いけないんだ。

こうなつた責任を笙子に押しつけて、私は舌での愛撫を続けた。

手は、胸からお腹へと滑っていく。

お臍の上を通り過ぎて、さらに下へ。

「ヤ……」

笙子の小さな手が、私の手を押さえる。目的地まであと数センチというところで。

「いや？ どうして？ 女の子はね、ここを触られるととっても気持ちいいの」

「でも……恥ずかしい……」

「私だって、触られるのは今でも恥ずかしいよ。

でもね、それでも触って欲しいって思う。そのくらい、イイことなんだ」

「沙紀さん……も？」

「そう。そして笙子も、すぐにそう思うようになる」

笙子の手から、少しだけ力が抜けた。私はその

隙を見逃さず、両脚の間に指を入れた。

「は……んっ」

脚が閉じられ、私の手を挟み込む。

だけど私の指先は、目的地に達していた。

「や……あぁっ……だめ……っ」

笙子が、両手で顔を覆う。

指先に、潤いを感じられる。

そこは、濡れていた。

溢れ出すほどに。

人差し指と薬指で割れ目を軽く広げ、中指を滑り込ませる。

これまで、他の女の子のこんな部分を触ったこととはないが、自分と比べるとずいぶん未発達な印象を受けた。

それでも、ちゃんと濡れている。

これまでのキスと胸への愛撫で、ちゃんと感じていたのだ。

少し嬉しかった。

私の気持ちは、決して独りよがりではないとわかったから。

「笙子……、濡れてるよ」

「やぁ……」

耳元でささやくと、笙子は顔を隠したままいやいやと首を振った。

恥ずかしがるとわかっていて言うんだから、私も少し性格が悪い。

割れ目に沿って、ゆっくりと中指を滑らせた。

笙子が身体を固くする。

きゅっとならした唇から、小さな声が漏れた。

私は指を動かし続ける。

笙子と出会う以前は、もちろん同性とこんなことをしたことはない。だから、最初は少し戸惑っていた。

どんな風にすればよいのだろう。どうすれば、気持ちよくしてあげられるのだろう。

だけど、難しく考えることはないのだと、すぐに気付いた。

自分がこれまで付き合ってきた男たちにされたことのうち、気持ちよかったこと、もっとして欲しいと思ったことを、笙子にもしてあげればいいのか、と。

乱暴にはいけない。相手は、数日前にバー

ジンを失ったばかりの、しかも中学三年生。

そうつと、優しく、指の腹で触れる。

割れ目の端から端まで、ゆっくりと指を滑らせる。

十分に濡れているから、痛みを感じることはあるまい。

「ああ……、ああ……」

指の動きに同調して、笙子は声をあげた。

時々、身体がびくんと震える。

指を動かす範囲を少しずつ狭くしていつて、やがてある一点で止めた。

笙子の体内へと続く、入口。

指先を少しだけ、潜り込ませてみた。ほんの、

一センチくらい。

「ああっ、ひゃああっ！」

笙子が一際大きな声をあげた。感じたというよりも、驚いたのだろう。

そこは、私の指をたった一度受け入れたことがあるだけの場所。まだまだ、異物を挿入されることに慣れていない場所。

中指を第一関節まで入れたところで、それ以上

奥への侵入を止めた。ここから先は、ゆっくりと少しずつ慣らしていかなければならない。

笙子の中は熱く潤っていた。

指先が、きゆうつと締めつけられる。

「ん……ふう……ん」

「痛くない？」

一応、訊いてみた。もっとも「痛い」と答えたとしても止めるつもりはなかった。少し、進行を遅らせるだけのこと。

これは、誰もが一度は通る道なのだ。それを越えたところに、本当の悦びがある。

それに、苦痛に歪む笙子の顔はとても煽情的だ。もっと見ていたい。

私つて、少しサドっ気があるのだろうか？

いや、きつと、この子の表情がサド心呼び起こすんだ。

ゆっくりと、中指を奥へ進めていく。膣壁は又ルヌルと濡れていて抵抗感さほどないが、第二関節くらいまで入ると全体で締め付けてくるのを感じる。

「ああ……んん……ああ……」

眉間にしわを寄せて、笙子が切ない声を漏らす。
一気に奥まで指を入れるのは止めて、一度指先
まで引き抜いた。

それからまたゆっくりと挿入していく。
それを、何度も繰り返す。

私の指全体、笙子の膣全体に潤滑油を行き渡ら
せるように。

「はあっ……あっ……ああんっ……」

指の動きに合わせて、か細い声があがる。

「私の指が入ってるの……わかる？」

「は……はい……あ、ふう……ああん！」

抜き差しの一往復ごとに、指を少しずつ奥へと
入れていく。

それに従って、笙子の声が高くなってゆく。

「ああっ……ああっ……あ……んっ！ ああっ、

ああっ！」

「気持ちいい？ 痛くない？」

「ん……だ、大丈夫……です……んあっ！」

嘘だな、と直感する。まだ二度目だし、この様
子では、まったく痛くないわけではない。

引き抜いた指に、ほんの少し血が付いていた。

でも、私は指の動きを止めなかった。

私も、そして笙子も、それを望んではない。

痛いのは確かだろうけど、それ以上に快感を覚
えているはずだ。痛いけど気持ちいいというこの
感覚、私にも覚えがある。

「はあ……あ……あん、……あんっ！
ああああっ！」

指を動かすたびに、笙子のそこはくちゆくちゆ
と湿った音を立てる。

いつしか私の中指は、根元まで飲み込まれてい
た。

一番深いところに辿り着いて、つるりとした感
触の子宮口が指に触れる。

やっぱり、まだきつい。指全体がぴったりと締
めつけられている。

私は指の抜き差しを止め、中で回すように動か
した。

「あんっ、あんっ、あああんっ！ ああっ！」

「気持ち、いい？」

そんな私の質問は、笙子の耳には届いていない
ようだった。絶え間ない声をあげながら、頭を左

右に振っている。

まだ、痛いはずだ。だけど確かに、感じてもらう。

バージンを失ったばかりの、まだ中学生の女の子が、私の指に感じている。

私の心は、背德的な快感に震えていた。

もつともつと、感じさせたい。

もつともつと、笙子を乱れさせたい。

(初心者には……指よりも、舌だよな……)

指を入れたまま、私は身体の位置を下へずらしていった。

私の指が与える快感に溺れている笙子は、そんな動きにはまったく気付かずに、シーツを掴んで鼻にかかった声を上げている。

そんな笙子の不意を衝いていきなり、一番敏感な部分に舌を這わせた。

「ひゃうつ？ ああつ！ ああああつ！」

笙子は驚きの声をあげると同時に、身体を仰け反らせた。

両手が、私の頭に触れる。

「やだつ！ そんな……ああつ！ そんなとこ

ろ……やああつ！」

そんな抗議の声と、髪の毛を掴んだ手を無視して、私はクリトリスを舌先で転がした。

「ひゃあああつ！ やああつっつん！ あんつ！

ああんつ！ んんーっ！」

笙子の身体が強張る。

膣壁がきゅつと締まって、指を締め付ける。

太股が、私の頭を挟み込んで小さく震えている。

私は、舌先での愛撫を続けた。

これをされるのが大好きなのだ。

微かに触れるか触れないかという、舌先でくすぐられる感触。同時に指を入れられて、身体の内

と外から与えられる快感。

笙子にとつても、クリトリスからの快感が、挿

入の痛みを忘れさせてくれるだろう。

「あああつ、やあつ！ だ……めえつ、も

う……っ！ あああつ！ あああつ！」

しつこいくらいに、舐め続ける。

五分。十分。

休みなく、いつまでも。

「ひついい……、はあああ……ああ……んっ！

んつくう……や……あ……」

笙子の声は、悲鳴から泣き声へと変わっていく。絶え間なく声を上げ続けて、やがてその声がかすれはじめの頃。

「はあっ！ ああああっつっ！

あああーっつ！」

その小さな身体をひととき大きく震わせて。

笙子は、生まれて初めてのオルガスムスに達していた。

* * *

「はあ……、はあ……、はあ……はあ……」

笙子はしばらく、荒い呼吸を繰り返していた。

全身汗びっしょりで、胸が大きく上下している。

私は腕枕してやりながら、そんな様子を見つめていた。

「可愛かった。大好きだよ、笙子」

やがて呼吸も落ちついてきた頃、人差し指で笙子の鼻をつついて言った。笙子は、その指先にちゅっとなぐさをする。

「……わたしも、沙紀さんのこと……。その……好き、です。最初に、助けてもらったときから……」

「なーんだ。じゃあ私たちは両思い。最初の時も合意の上だったんじゃない」

「気にする必要はなかったんだ、と一安心。だけど笙子は唇を尖らせる。」

「それは違いますよ。あの時は私、全然、そんなつもりじゃなくて……。心の準備もできていなかったんですから」

「じゃあ、今日は心の準備ができてたの？」

「……実は、少し」

「どうして？」

「沙紀さんが帰ってくる少し前、電話があったんですよ。静内さんから」

意外な名前が出てきて、私は驚いて上体を起こした。真上から、笙子の顔を覗き込む。

「彩樹が？　なんて？」

「今夜あたり、沙紀さんが襲いかかってくるはずだから、心の準備をしておけて」

笙子がぐくぐくと笑う。

「その通りでしたね」

「あ、あいつう……」

彩樹の奴、こうなることを見越して、私にあんなことを言ったのか。要するに、私をけしかけたんだ。

でも、そのおかげで笙子と結ばれたのだといえなくもない。だからといって礼を言う気にはなれなかつたが。

「沙紀さんって、実はやっぱり女の人が好きなんじゃないですか？」

「同性にこんな気持ちになったのは、笙子が初めてだよ」

そういつて、もう一度キスをする。軽く触れて、一度離れて、それからもう一度しっかりと唇を重ね、舌を絡めあう。同時に、手が笙子の下腹部をまさぐる。

笙子はくすぐったそうに身体をよじった。

「やあ……沙紀さんのエッチ……」

「でも、気持ちよかつたでしょ。もう一回、する？」

「え……？ えっと……その……」

笙子は真っ赤になって、だけど小さくうなずいた。

もちろん私は、二度目もうんと時間をかけて、また笙子が泣き出すまで愛撫を続けた。

それから私たちは、暑さも気にせず、しっかりと抱き合って眠りについた。

私たちはそれ以来、毎晩のように愛し合った。

いや、毎晩という表現は正しくない。用事のない日の日中にカーテンを閉めてしたこともあるし、朝起きた時にしたこともある。

自分が、こんなにセックスが好きだとは思わなかった。だけど笙子も嫌がっている様子はないし、構わないだろう。

実際のところ、嫌がるどころではない。むしろ喜んでいってもいい。私が求めれば素直に応えるし、さすがに自分から口に出しておねだりすることはないものの、お風呂上がりに甘えるように身体をすり寄せてきたりもする。

笙子との同棲生活は、これまで以上に上手くいっていた。

もちろん、毎日セックスばかりしていたわけではない。

私はバイトもあるし、それ以外の日は笙子に札幌の街を案内してやったり、プールや海へ連れて行ったりもした。

そして今日も、そんなデートの日だった。

二人で映画を観て、そのまま街で夕食を済ませた後で、私は考えていた。この後どうしよう、と。

大学の友達となら、飲みに行くかカラオケか……というところだが、笙子は未成年だし、カラオケというのもイメージに合わない気がする。

ゲームセンターか、ボーリングかビリヤードか……と考えているうちに、ふと、悪戯心が湧いてきた。

「ね、笙子」

歩道を歩きながら笙子の肩を抱いて、耳元でささやいた。周囲の人には聞こえないように、小さな声で。

「たまに、私の部屋以外のところで、しようか？」

「え？」

言われたことの意味が分からないのか、笙子がこちらを見て首を傾げる。

「……ラブホテルって、行ってみたくない？」

「え……」

見る見るうちに、頬が赤く染まる。

この数日でずいぶん経験を積んだとはいえ、まだまだうぶな女の子だ。真っ赤になって、恥ずかしそうにうつむいている。

「どう？ いや？」

「……ちよつと、興味はありますけど……」

「よし、決まり。じゃあ行こう！」

「え……、でも……」

肩を抱いた腕に力を込めて、少し強引に、笙子をススキノのホテル街へと導いていった。

* * *

「う……わあ……」

部屋に入ると、笙子は驚いたような、あるいは感心したような声を上げた。

「こんな風になっているんですね……」

ススキノの南端に近い一角にある、とあるラブホテルの一室。一番目立つのはダブルベッドで、周囲の壁や天井は、鏡張りになっている面積が妙

に広い。

あとは小さなソファとテーブル、テレビ、冷蔵庫やポットといった、ごくありふれた品々が置かれている。

笙子はスリッパを脱いでベッドに飛び乗ると、きよろきよろと周囲を見回した。心なしか頬が赤い。

なるほど。ベッドに乗った状態で、自分がどう映るか確かめたのだろう。

「どお？ お嬢さん、感想は？」

「……この鏡は、ちよつと恥ずかしいですね」

「それがいいんじゃない」

私は背後から笙子を抱きしめると、うなじに唇を押しつけながら手を胸に回した。もう一本の手は、下へ滑ってスカートをたくし上げる。

「やあ……そんな、いきなり……」

か細い抗議の声を無視して、手を中に入れた。ショーツの上で中指を滑らせる。そこは幾分湿っぽく、そして周囲よりも体温が高いように感じられた。

「ラブホテルに入っただけで、もう興奮してるん

じゃない？」

「ん……ふ……うん……。そんなぁ……」

やや乱暴な愛撫に対して、笙子は目を閉じて身体をよじった。確かに、もう感じている。

私にも憶えがある。ラブホテルというのはただ一つの目的のために訪れる場所だから、中に入った時点で、心はもうその気になっているものだ。

ショーツの中に指をもぐり込ませると、熱い滴が私の指を濡らした。笙子の身体は、日増しに敏感になっていくようだ。

「ああ……あ、……あ、……んっ！」

第一関節くらいまで指を中に入れて、小刻みに動かす。中から、熱くとろけた蜜がさらに溢れ出してくる。

バーズンを失ってから、まだ半月も経っていない女の子なのに、こんなに感じてる。

私の初体験は高校二年だったけれど、セックスが本当に良くなってきたのは、大学生になってからだ。笙子はもともと感じやすい体質なのだろうか。

（それとも……。私って実は、テクニシャン？）

ついそんなことを考えてしまつくらい、笙子は私の愛撫に敏感に反応してくれる。それが楽しいから、ついつい毎晩してしまふ。

「ほおら、もうぐっしより濡れてる。感じやすいんだから」

「ん……、はぁ……っ」

笙子は目を閉じて、体重を私に預けて、本格的に感じる体勢になっている。すっかり、その気になったようだ。

私はちよつとだけ、意地悪することにした。いきなり愛撫を中断する。

「……でも、おあずけ」

「え……？」

驚いたように目を開けた笙子は、そのまま潤んだ瞳で私を見た。このまま続けて欲しいと、その瞳がせがんでいた。

「先に、一緒にお風呂入ろうよ。せつかく、二人で入れる広さがあるんだから」

アパートの狭いお風呂では、とてもそんな真似はできない。一緒にシャワーを浴びたことはあるが、湯船に浸かるのは不可能だ。

その点、ラブホテルのお風呂はいい。狭すぎず
広すぎず、ちょうど湯船の中で密着できるスパー
スがある。

一緒にお風呂、というのは笙子にも魅力だった
らしい。急ににこやかな表情になる。

湯船にお湯が貯まるのを待って、二人でバス
ルームへ入った。笙子は髪が長いから、タオルを
巻いてまとめめている。普段は髪に隠れている背中
とうなじが露わになっているのが、なんだか色っ
ぽい。

二人で湯船に浸かると、お湯がざあつと溢れた。
私は、笙子を背後から抱きしめるような姿勢にな
る。無防備なうなじにキスをしたの言うまでも
ない。

「こんなところで……、のぼせちゃいますよお」
「別に、お湯の中じゃなくたってのぼせるくせ
に」

私はそのまま、先刻ベッドの上でしていたこと
の続きを再開する。

笙子の身体はすぐさま反応し始めた。息が荒く
なり、あの部分はお湯の中でもはつきりわかるく

らいにぬめりを帯びている。小さな乳首も、つん
と固くなっている。

愛撫を続けながら、耳たぶをそつと噛む。甘い、
鼻にかかったような声が漏れる。

指を、少しずつ中へ沈めていく。まだ、少し抵
抗感がある。けどもう痛みはしない。気持ち
よさそうに、小さな溜息をついていた。

私はそのまま、愛撫を続ける。笙子は切ない吐
息を漏らしながら、私に身を任せている。

「沙紀さん……。私、もう、本当に……」
やがて笙子の顔は、真っ赤に茹で上がったよう
になった。それが、お湯と私の愛撫のどちらがも
たらした結果かは分からない。だけど、そろそろ
限界かもしれない。

このまま笙子をいかせたい気もするが、そうす
ると本当にのぼせて倒れてしまいそうだ。未練は
あったが、湯船での愛撫を中断した。

笙子はふらつきながら、洗い場へ上がる。脚に
力が入らないのか、そのままタイルの上にぺたん
と座り込んだ。

「身体、洗ってあげる」

たつぷりとボディソープを染み込ませたスポンジを、放心していた笹子の背中に押しつける。笹子の身体がびくと震えた。

私は優しく、スポンジを滑らせた。背中から肩、腕、そして前の方へと移動していく。

「や……あ……」

乳房の上で円を描くようにスポンジを動かす。空いている手も前に回して、もう片方の胸を包み込んだ。そして、背後から身体を密着させる。

「沙紀さん……。あっ、あんっ、あんっ！」

「どうしたの、変な声出して？」

そう言つて笑いながら、スポンジを一番敏感な部分で滑らせる。笹子の声が一際高くなった。

ボディソープとはまた違ったぬめりが、私の指に触れる。

「こんなに感じちゃって、笹子つてばエッチだね。身体を洗つてあげてるだけなのに」

「……エッチなのは……さ、沙紀さんですよお……」

黒い瞳を潤ませて、笹子は抗議する。私は手の動きを速くした。

「反論する気？ そんな子はこうしちゃうぞ」

泡だらけのスポンジが、脚の間を小刻みに往復する。

「やあつ！ あん、あん！ ああんっ！ ああつ、あああつ！」

笹子は上体を仰げ反らせて、私に体重を預ける。一瞬、全身が硬直し、やがてふうつと力が抜けていった。

「沙紀さんの、意地悪う……」

シャワーをかけて泡を洗い流してやっている間、笹子は荒い息をしながら恨みがましい目で私を見ていた。その顔に、一瞬だけシャワーを向ける。

「私には、悦んでいるように見えたけど？」

それが事実だから、笹子はなにも言い返せなくなつた。

黙つてこちらを向くと、タイルの上に落ちていたスポンジを拾い上げ、ボディソープを含ませた。

「じゃあ今度は、わたしが沙紀さんを洗つてあげます」

「え？」

言うなり、笙子が抱きついてくる。スポンジが、胸に押しつけられた。

「ちょ、ちょっと……笙子？」

笙子は戸惑っている私を無視して、スポンジと手で私の身体を撫で回している。今まで笙子を可愛がって興奮していた私の身体は、簡単に反応しはじめてしまった。

「や……あつ、はあ……ああつ、んっ！」

スポンジが胸からお腹、そしてさらに下へと移動していく。私がしたのと同じように、一番感じるあの部分の上を前後に滑っている。

「ああっ、あああつ……こら、しょ……こ……」

「あーっ！」

「どうしたんですかあ？ 私は身体を洗ってあげてるだけなのに、沙紀さんってエッチ」

先刻の私の口調を真似て、笙子が意地の悪い笑みを浮かべる。

「こら、笙子！」

私は笙子を抱きしめると、そのまま押し倒した。泡に覆われた肌と肌が擦れ合って、とても気持ちがいい。

唇を重ねる。手は身体中をまさぐっている。

「やあつ、こんなところで……ちゃんとベッドでしましょうよあ……」

もう、前戯は十分だった。私ももう我慢できない。

シャワーで二人の身体に残った泡を洗い流すと、笙子を抱き上げてバスルームを出た。

「あの……」

笙子をベッドに横たえて、その上に覆いかぶさるうとした私を、笙子の手が押しとどめた。

「……今日は……、わ、わたしが沙紀さんに……して、あげます」

「え？」

「だって、いつもしてもらえばっかりで……。先刻お風呂で、思ったんです。わたしも、沙紀さんを気持ちよくしてあげたいって……」

恥ずかしくなったのか、そこまで言うと言つ赤になつてうつむいた。

私は、その申し出を喜んで受け入れることにし

た。これまで、ちょっと触られたくらいのあるが、笙子の方からそれ以上のことをしてもらったことはない。

ベッドに仰向けになる。その上に、笙子が覆いかぶさってくる。

いつもと上下が入れ替わっただけで、ずいぶん雰囲気が違うものだ。なんだか緊張する。

唇が近付いてくる。

優しく触れる。

躊躇ためらいがちに、舌が入ってくる。私も舌を伸ばしてそれに応える。

私も笙子も、キスが大好きだ。キスだけを何分も続けることも多い。だけど今回のキスは短かった。それでも不満は感じなかった。今日はもう、キスだけで満足できる段階はとうに通り過ぎていく。

「……………初めてだから、上手くできないと思いますけど……………許してくださいね」

「……………笙子にしてもらうなら、なんだって嬉しいよ」

笙子の頭が下へ移動していく。乳房に唇が触れ

る。私は小さく声を上げた。

胸を、強く吸われた。キスマークが残るくらいに。

私が笙子に、いつもしているように。

恋人にキスマークをつけるのは好きだ。相手が自分のものだという、印をつけたみたいで。

笙子も私の真似をしているのだろう。だけど、私と笙子では少し事情が違う。

笙子は人前で肌をさらすことなどほとんどないだろうが、私は毎日のように道場で着替えをしている。もしも彩樹あたりに見られたら、またからかわれることだろう。

だけど笙子はそのなお構いなしに、私の胸を吸い続けている。両方の乳房に、いくつも赤い痕を残して。

それでも、笙子を止めなかった。私の身体に、笙子の愛の証を残して欲しかった。

「……………あ……………」

気持ちいい。笙子は少しずつ位置を変えて、何度も私の胸を吸う。その度に、溜息に似た声が漏れた。

やがてマーキングの作業は一段落ついたのか、
笙子は攻撃目標を乳首に変えてきた。

口に含んで、強く吸う。痛みすら感じるほどに
強く。

そのまま、舌先で乳首の先端をくすぐる。

「はあっ……あん！ ああっ！ あんっ！」

私は激しく反応した。実は、乳首を攻められる
のはかなり弱い。

それを知ってか知らずか、笙子は執拗に乳首を
吸い続ける。私の乳首はその愛撫に耐えて、ぴん
と固く立っていた。固くなっている時の方が、よ
り敏感に感じる。その点は男性器と同じだ。

「ああん！ あっ……笙子お……」

胸への愛撫だけで、私はもうすっかり濡れてい
た。そこはまだ、まったく触られていないのに、
熱い液体がお尻の方まで溢れ出しているのがわか
る。

私は両脚で笙子の身体を挟み込んで、性器を擦
り付けるように腰をくねらせた。

「はあ……ああ……」

「沙紀さんが、エッチなことが大好きな理由、少

しわかったような気がします」

笙子はようやく私の胸から口を離すと、につこ
りと微笑んだ。

「こうして相手が反応してくれるのって、楽しい
ですね。沙紀さん、感じてるのでしょうか？」

「うん、うん。すごく気持ちいいの……」

私はもう、歯止めが利かなくなっていた。久し
ぶりに愛撫される側に回って、これ以上はな
いらいに感じていた。

「ねえ、続けて。もっとして、もっと……」

「はい。今夜はいつぱい、しちやいますから」

また、笙子が顔を下げる。ただし、今度の目標
は胸ではない。

「ああっ！ ああああっっっ！」

笙子の頭が、私の股間に潜り込む。濡れそぼつ
たその部分にキスされた瞬間、それだけで私は軽
くいつてしまった。

「ああっ！ はああっ！ あ……あん、ああ
んっ！」

気持ちいい、なんてもんじゃない。舌が触れる
たびに、身体に電流が走る。ひと舐めごとに

てしまいそうだ。

こんなに、感じるなんて。

しばらく忘れていた感覚だった。このところい
つも、笙子にしてあげるばかりだったから。それ
でも精神的には十分に満たされてはいたが、肉
体的な快感はまた別物だ。

「イイっ！ イイっ！ ああっ！ あああっ！
いいっ、イっちやう！」

ピチャピチャと、仔犬がミルクを飲んでい
る音が聞こえていた。実際、笙子はお腹を空
かせた仔犬と同じくらい、夢中になって私を舐
めている。そして私も、仔犬のミルク皿を満
たせるのではないかと思うほどに濡れていた。

おそらく本人は、自分の行為が私にどれほどの
快感を与えているのか気付いていない。ただただ、
一心不乱に舌を動かしている。

ピチャピチャ、ピチャピチャ。

仔犬のように舐め続けている。

私はもう、発狂寸前だった。

「笙子おっ！ ああ、笙子おっ！

あああっつ！ ああっ！ 笙子おっつ！」

両手で笙子の頭をギュッと掴んで、両脚で笙子
の顔を挟み込む。さらに腰を浮かせて、舌がもつ
と深い部分まで届くように押しつけた。笙子の舌
が、私の中で動きを増す。

「あああーっ！ いいっ！ いくうっつ！
いっちやう！」

こんなに感じたのは初めてだ。普段の基準でい
けば、私は既に達しているのだろう。それでもま
だ、身体は笙子の愛撫に反応し、さらなる高みへ
と昇っていく。

それは、これまでのセックスや自慰で経験して
きたオルガスムスよりも、さらに一段上の快楽
だった。そして、今いる場所はまだ頂上ではない。
私はまだ、昇り続けている。

笙子が、特別上手なのだとは思わない。その舌
の動きは激しくはあるが、むしろ単調と言っても
いい。経験の浅い彼女が「舐める側」になったの
は初めてなのだから当然だ。

なのに、感じてしまう。笙子の舌に愛撫されて
いるという、その事実によって。

「あああああーっつ！ あああっ！ しょ……

「笙子おっ！」

何の予告もなしに、指が入ってきた。

最初はゆっくりと一本だけ。

それがスムーズに入ることを確かめてから、もう一本。

自分が、指一本でもいまだに痛みを覚えるから、慎重になるのだろう。だけど笙子の華奢な指なら、三本でも私はすんなり受け入れられる。

指を入れた後も、舌の動きは止まらない。つまり、舌だけの愛撫でも気が狂いそうになっているのに、それに奥深くまで挿入された指による刺激が加わったのだ。

もう、限界だった。

「しょ……あああつ！　あああああんつ！

あああつ、ああああ　　っ！」

二本の指が、私の中で躊躇いがちに動き始めてから、十秒と保たなかった。

悲鳴を上げながら、私の意識は快樂の海の中へ溶けこんでいった。

* * *

しばらく、朦朧きんらうとしていたようだ。

意識がはつきりすると、笙子が心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「……あの、大丈夫ですか」

私は小さく吹き出すと、笙子の頭を撫でた。

「すっごい、感じちゃった。笙子って上手なんだもん」

「えーっ」

笙子の顔が見る間に赤くなる。

「そんなことないです。……沙紀さんが感じやすいんですよ」

「とにかく、気持ちよかった」

そう言って、ぎゅつと抱き寄せる。

「いっぱい、いっぱい、イっちゃった」

「嬉しい……。沙紀さんが感じてくれて」

「私も嬉しい。笙子にしてもらって」

そのまま私たちは抱き合って、しばらく余韻を楽しんでいた。

お互いの体温を、鼓動を、呼吸を肌で感じていた。

それがすごく気持ちよかった。たっぷりとかいた汗が引いてしまつまで、ずっとそうしていた。それからようやく、私は上体を起こした。

「じゃあ今度は、私が笙子のを舐めてあげる」

「だめですよ、次もわたしがする番です」

「どうして？」

「これまで毎日、沙紀さんがしてくれてたんですもの。今夜はわたしが、沙紀さんをいっぱい気持ちよくしちゃいます」

悪戯な笑みを浮かべながら、笙子が私の胸に手を伸ばしてくる。私も、笙子の胸を掌で包み込んだ。ベッドの上に向かい合って座って、相手の胸を愛撫し合う。お互い、一歩も譲らない。

「強情だね」

「沙紀さんこそ」

「じゃあ、一緒にしようか」

「一緒に……って……」

「シックスナインって、知らない？」

経験はなくとも、その言葉は知っているのだろう。笙子は赤くなってうつつむいた。一見うぶなようだが、笙子も一応、エッチに関する知識は人並

みにある。

「……でも、あの……」

「いや？」

「いやじゃないですけど……ここでそれをすると、鏡に映って恥ずかしいかなって……」

「ばーか、それがいいんじゃない」

かなり強引に笙子を納得させて、お互いを舐めあつその行為を始めた。

それがすごく気持ちよくて。

鏡に映つたその光景がとても刺激的で。

私たちは、何度も絶頂を迎えた。

これまでで一番、激しい夜だった。お互い、疲れきつて動けなくなるまで、何度も何度も愛し合った。

「……わたし……どんどんエッチな女の子になつちやうみたい」

夜更けのベッドの中で、笙子が半分眠つたような声でつぶやいた。

「いいじゃない。エッチな笙子も、大好きだよ」

「それってフオローになってません。……全部、沙紀さんのせいですよ」

「じゃあ、責任取らなくちゃね」

笙子に腕枕してやりながら、私は笑って言った。

いつまでも笙子と一緒にいられないのは、最初からわかっていたことだ。

いずれは、帰らなければならぬ。

けどその別れは予定よりも早く、あまりにも突然で、そして呆気ないものだった。

まだ夏休みは残っているある日。

私がバイトから帰ると、部屋に笙子の姿はなくて。

留守電のランプが点滅して、メッセージがあることを示しているだけだった。

「……ごめんなさい。帰らなきゃいけなくなりました」

メッセージは、それだけだった。周囲が賑やかだ。公衆電話からかけたものらしい。

私はしばらく呆然としていたが、やがて状況を理解した。

笙子は、連れ戻されたのだ。留守電で「帰らなきゃいけなくなった」と言っていた。自分の意志で帰ったのなら「帰ることにした」と言うべきだ

ろう。

だけど、どうして？

その理由も、見当がついた。

笙子は何度か、家に手紙を出していたはずだ。

近くの公衆電話から、電話もしていた。

そして、カードで買い物も。

北海道、それも札幌にすることは、消印から簡単にわかる。そして笙子の父親のように十分すぎる権力と財力を持った者なら、それ以上の情報を得ることも可能だろう。

誰かが、連れ戻しに来たのだ。

おそらく、買い物に行った時にでも見つかった、そのまま連れられていったのだろう。その途中にあつた公衆電話で、簡単なメッセージを残したに違いない。たった一言だけなのは、連れ戻しに来た誰かの目を盗んでかけたものだからだろうか。

どうして笙子は、部屋に戻らなかつたのだろうか。こちらに来てから買った服やバッグも残っているのに。

それは多分、私を巻き込まないためなのだろう。笙子が外で捕まったのなら、向こうは私のことは

知らないはずだ。電話を逆探知したにしろ、カード会社に手を回したにしろ、笙子がこの町内にいるとわかるだけ。それだけでは私の存在はわからない。

これで事情は理解できたが、シヨツクは大きかった。

私はその日、何もせずにただ呆然としていた。

* * *

突然笙子がいなくなつて、ぽつかりと穴が開いたような生活にようやく慣れはじめた頃、一通の手紙が届いた。

笙子からだつた。

私が推測したのと大きな違いはない、連れ戻された時の状況を説明していた。

向こうの住所は書いていなかった。「しばらく、わたし宛ての手紙や電話は全部チェックされそうだから」と。どうやら、外出時も監視がついているらしい。

それでよかつたのだと思う。笙子の住所がわ

かつたとしても、いつたい手紙に何を書けばいいのかわからないから。

そもそも一緒に暮らしていた時だつて、二人の間にそれほど多くの会話はなかった。身体の相性は確かに抜群だつたが、性格も趣味も違つし、共通の話題はそう多くない。

会話なんかなくても、ただお互いに、相手が傍に居ること、相手の体温が感じられることが心地よかつたのだ。

だから、手紙や電話、あるいは電子メールで話が出来たとしても、それはあまり意味のないことだつた。

それでも笙子からは、その後も時々手紙が届いた。内容は主に自分の近況だつた。一応受験生ということで、そろそろ忙しくなつてくる頃だろう。もっとも笙子は、志望校の推薦枠に確実に入れるくらいの成績らしい。「高校へ行つたら、わたしも空手を始めようかと考えています。沙紀さんと同じことをしていると思うだけで、なんだか元気が

出てきます」手紙に書いてあったそんな一文は、私を少し喜ばせた。

そして手紙には必ず「会いたい」と書いてあった。今はまだ、親の監視の目が厳しいけど、そのうちにきつとと。

私も、会いたかった。笙子の小さな身体を、抱きしめたかった。

その願いは、当分叶えられることはないだろうけれど。

一度二人の生活に慣れてしまうと、独り暮らしはひどく寂しかった。

それで、一度だけ浮気をしてしまった。

彩樹と二人でお酒を飲む機会があつて、なんだかよくわからないうちにホテルに連れ込まれていたのだ。

私は酔っていたし、寂しかったし、身体も疼いていたから、そのまま彩樹に抱かれた。彩樹は私よりもずっと同性との経験が豊富で、テクニシャンで、確かに気持ちよかつたけれど、ことが終

わつた後の言いようのない虚しさはどうにもならなかつた。どんなに気持ちよくても、ただ肉体的な欲求を満たすためだけのセックスは、私にとってはあまりいいものではなかつた。

ただ、寂しさだけが募っていた。

その寂しさを紛らわせるように、私は空手の稽古に励んだ。

そして、秋に開催された全日本体重別選手権で優勝した。

その成績のためだろう。その後まもなく『Lファイト』への出場依頼が舞い込んできた。

それは「世界最強の女子格闘家を決める」という謳い文句の、打撃、組技なんでもありの、いわゆるヴァーリ・トゥードのトーナメントだ。過去二回開かれていて、今回が第三回だった。ちなみに前回と前々回の優勝者は、私が学ぶ北原極闘流の総帥の孫娘、北原美樹だった。彼女は私より一つ年下だけど、高校時代から「世界最強」と呼ばれていた、女子格闘技界の女帝だ。

もちろん今回も、タイトル保持者として美樹は出場する。同じ極闘流から二人も選ばれるというのは名誉なことだが、私は迷っていた。

理由は簡単、美樹には勝てないからだ。階級が違うから空手の大会で当たることは少ないが、これまで一度も勝てたことがない。彼女は、他を超越した圧倒的な存在なのだ。

もしかしたら一回戦くらいは勝てるかもしれないが、優勝できないのはわかっている。負けるとわかってる戦いに挑むのは好きではない。誰だって、痛い思いはしたくないものだ。

それでも私が出場を決めたのは、この大会がテレビで全国中継されるからだ。

別に、テレビに出たかったわけではない。ただ、もしかしたら笙子が見るかもしれないと思ったのだ。格闘技に興味を持ち始めているようだったから。

笙子は、空手をしているときの私を「格好いい」「素敵」と言ってくれた。だから、少しでもいいところを見せられたらいいな、と思ったのだ。

運良く一回戦を勝てて、もしも笙子がそれを見

ていれば、きっと喜んでくれるだろう。

* * *

十二月に日本武道館で開催された「L ファイト」の当日。

私は信じられない思いで、控え室にいた。

私と美樹さんの他、女子プロレス、柔道、テコンドー、キックボクシング等の第一線で活躍する選手八人が集まるこのトーナメントで、私は一回戦と二回戦を勝ち進んだのだ。

もちろん無傷で、とはいかない。特に、二回戦で女子プロレスラーにスープレックスで投げられた時に肩を痛めて、左手の突きが思うように出せない状態だ。

そして決勝の相手は当然、圧倒的な強さで勝ち残ってきた北原美樹だった。どう考えても私に勝ち目はない。

それでも、私は満足していた。ここまで来ただけでも十分ではないか。決勝では無理に勝つことなど望まずに、今の自分にできるだけのことを

すればいい。

そう思つて、決勝のリングへと向かった。

満員の観客。

会場内にこだまする大歓声。

リングに上がると、自分が、ひどく場違いな場所にいるように思えてきた。

こんな状況には慣れてる美樹が、普段通りの不適な笑みを浮かべている。

私は、ごくりと唾を飲み込んだ。

これから、彼女と闘わなければならぬのだ。

『決勝戦に先立ち、両選手に花束が贈呈されます』

そんなアナウンスが聞こえる。和服姿の女性が二人、それぞれ大きな花束を手にリングに上がっている。

「頑張ってください」

そんな声と共に差し出された花束を受け取ろうとしたところで、私は思わず声を上げそうになった。上げかけた手が途中で止まる。

「しょ……うこ？」

自分の目を疑った。一回戦でテコンドーの選手にハイキックを喰らった時に、視神経がどうかしてしまつたのか、と。

しかし何度瞬きしても、目の前に立っているのは紛れもなく笙子だった。服装のせいだろうか、一緒に暮らしていた頃よりも大人っぽく見えた。

長い黒髪をまとめた振り袖姿がよく似合っている。

「ど……」

「どうして、つて？」

周囲には聞こえない小さな声で、笙子が言った。

「気付いていませんでした？ この大会のスポンサー、父の会社なんですよ。それで、ちょっとお

ねだりしたんです」

なんとということだろう。私は全然気付いていなかった。笙子の父が経営する会社の名は聞いていたはずなのに。

「頑張ってくださいね。勝ったら、祝福のキスしてあげますから」

「……もし、負けたら？」

「やっぱりその時は、対戦者の方にキスしなきゃ

不公平ですよね」

「冗談じゃない！」

思わず、少し大きな声を出してしまった。笙子
が、他の相手にキスするところなんて見たくない。
「それでしたら、頑張ってください。応援してま
すから」

「……わかったよ」

渋々、私はうなずいた。受け取った花束をセコ
ンドに渡して、リングの中央に進む。

美樹が、こちらを見ている。これまで公式戦無
敗を誇る女王の目を、私は真っ直ぐに見返した。

「今度ばかりは、勝たせてもらう。勝たなきゃな
らない理由があるんだ」

私は言った。試合前に、格上の相手にこんな強
気な発言をしたのは初めてだった。

美樹が口の端を上げて笑う。

「……面白い。やってみなよ、できるものなら」
「やるぞ」

かつてないほどの闘志が湧き上がってくる。無
意識のうちに、私も笑みを浮かべていた。

なんとしても勝ってみせる。女帝・北原美樹に

土をつけた、最初の女子選手になってみせる。笙
子の唇を護るために。

そして、試合開始のゴングが鳴った。

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。